

## カントにおける「無関心」

門 脇 健

囲碁に「岡目八目」という諺がある。勝負に心奪われている対局者よりも、傍から碁盤を覗き込んでいる者のほうがより冷静で正確な判断を下せるということであろう。そのとき、対局者の目を曇らせているのは勝敗への関心であり、碁盤を傍から覗き込んでいる者はその関心に心惑わすことはない。つまり、勝敗への無関心がより冷静で正確な判断を可能にするのである。

このような無関心は学問においても客観性として重要な役割を演ずる。客観性、厳密性を重んじるカントの学問においても、このような無関心は重要な役割を振り当てられている。しかし、その無関心にはきわめて独特な意味合いが込められているように思われる。本稿ではそのカントの独特の無関心に焦点を絞り、カントの思惟形式を見て行き

たい。

## 一 無 関 心

カントはその名著『純粹理性批判』の序文において、形而上学の混乱、つまり神とかガイスト（霊・精神）の存在に関する様々の主張が入り乱れる様を「終わることのない戦いが展開される競技場」に譬えて、その戦いの勝敗に対する「無関心」について次のように述べている。

いかなる（形而上学的）方途も徒勞に終わってしまったと言われる現代を支配しているのは倦怠と完全な無関心である。それは混沌と闇夜を産む母である。しかしながら一方においては、学問がピントのずれた熱意によって不分明になり混乱し無用のものになってしま

ったそのときには、かえってこの無関心が、学問をや  
がて改造し開明する源泉、少なくともその序曲となる  
のである。(A, X)

この「無関心」の原語は Indifferentism 或は Gleichgültigkeit である。前者は、形而上学という「競技場」において独断論と経験論のどちらが勝利をおさめようが「違いはない」というニュアンスをもった言葉であり、後者は、勝利をおさめるのは「どちらでもよい」というニュアンスをもった言葉である。つまり、両方とも形而上学という「競技場」での勝敗に関心を失ってしまっている状態を指す言葉である。しかし囲碁における「両目」が勝敗に無関心でも、囲碁そのものには関心を失っていないように、ひとは形而上学という「競技場」での勝敗に関心を失ってもそこで争われている形而上学の問題そのものには無関心ではない。それは「人間の本性にとって無関心ではいられない対象 (V, X)」だからである。

つまりカントは形而上学における論争には無関心ではあるが、形而上学の問題には強い関心をもっていたということである。眼前で主張される様ざまの形而上学的主張が無関心なる目にはっきりと「不分明で混乱し無用である」と映ったとき、この無関心は新たな形而上学的主張を開始す

るのである。

しかし、未だ形而上学という「競技場」で戦いが続いている現在においては、その戦いの勝敗に対しては「無関心」という態度に徹することが唯一の道である。カントはその「無関心」からの出発について次のように述べている。

この無関心は軽薄さの結果ではなく、もはや仮象の知に左右されない現代の成熟した判断力の成果であるのは明らかである。従って、この無関心は理性にそのあらゆる仕事のうちでも最も困難な仕事を要求する。その仕事とは自己認識に新たに着手し、一つの法廷を開廷することである。この法廷は、理性が正しい主張をすれば理性の権利を保証し、それに対し根拠のない越権行為はいかなるものでも、裁判官の気まぐれではなく理性の永久不変の法則によって棄却することができる。この法廷こそが純粹理性批判にほかならない。

(A, XI)

このようにカントに『純粹理性批判』という「一つの法廷」を開廷させたものは、形而上学という「競技場」で展開される戦いの勝敗への「無関心」にほかならない。つまり、「無関心」へのカントの関心があので『純粹理性批判』という膨大な書物を書かしたためである。その書物の膨大さ

そして厳密さは、確かに私達をうんざりさせる裁判の判決文のそれを思い起こさせるものがある。

ではそのカントの異様とも言える「無関心」への関心とは、いったい何に由来するのであろうか。確かに「無関心」そのものはその時代の覆うひとつの雰囲気であったかも知れない。しかし、その「無関心」への関心となると、これはカント独自の立場である。このような立場にカントはいかにして立つことになったのであろうか。

## 二 『視霊者の夢』

このカントの「無関心」の立場は、一朝一夕に出来上がったものではない。『純粹理性批判』出版の十五年前に当たる一七六六年にカントは既に『視霊者の夢』という作品において「無関心」という立場から新しい形而上学を構想している。

この作品は『形而上学の夢によって解明された』という副題を持つ。一見すると「形而上学」の立場から「視霊」という妖しげな現象を批判するという内容が予想されるかも知れない。しかし、カントは形而上学についてはつぎのようになります。はつきりと決別を宣言するのである。

さらにわたしは形而上学の広般な分野を占めるガイス

トに関するすべての材料を、まったく用済みのもの、一卷のおわりとして退けることにする。こうしたものは将来も、わたしには何の關係もないであらう。<sup>①</sup>(44)

カントはガイストという不確かな現象を扱う形而上学を「夢」のごときものとして切り捨てるのである。その不確かさを浮き彫りにしたのは視霊という妖しげな現象の考察であった。

元来、このカントの著作群の中で異彩を放つこの『視霊者の夢』とは、カントの視霊者スエーデンボリに対する並々ならぬ関心を第一の執筆動機とする著作である。スエーデンボリ(二六八八—一七七二)とは一七四〇年ごろからヨーロッパ全土で評判となった視霊者である。カントはこのスエーデンボリの著作を読み、彼のことを可能な限り調査し、あまつさえスエーデンボリ本人に手紙さえ出していたという。その手紙は失われてしまったため、カントがスエーデンボリになにを訊こうとしていたのかは分からない。しかし、カントはスエーデンボリに異様とも言えるような関心をもっていたことは明らかである。

カントの生きた時代においては、確かに「視霊者」を名乗る妖しげな連中が活躍してはいた。しかし、視霊などという現象はカントのような一人前の学者が正面から扱うべ

き問題ではないというのが当時のアカデミズムの一般的な了解であった。実際、カント自身も『視霊者の夢』の第二部の冒頭で科学アカデミーは決してこのような問題を懸賞問題の題材にはしないでであろうと述べている。

しかし、カントはこの視霊現象にきまじめに取り組む。

それはスエーデンボリの視霊現象のうちには無視するにはあまりにも確実な例があったからである。カントは三つの実例を挙げて報告している。そのうちの二つは噂以上のものではないが、という保留をつけて紹介しているが、第三の実例は「完全な証明がきわめて容易に与えられるにちがない(48)」実話(die Geschie)として紹介している。それはおおよそつぎのような事件である。

ストックホルムから五〇マイルほど離れたある町で会合に出席していたスエーデンボリは、その席で突然「今ストックホルムのジュエーデルマルム地区で大火災が発生した」と言い出した。そして、数時間後「火災は自宅から三軒目でおさまった」と報告した。二日後、スエーデンボリの言葉と完全に一致する報告がストックホルムから届いた。<sup>2)</sup>

この実話に接する以前にはカントはこのような現象は「十分に証明されていない(72)」という理由からこの種の

現象を否定する立場にいた。しかし、「完全な証明」が得られたいま、そのような立場は成立しない。カントはあたかも視霊現象を完全に認めたかのようなのである。彼は、そのスエーデンボリの実話報告を終えてつぎのように述べる。

ひとはおそらく尋ねるであろう。「理性的なひとが聞くに耐えないメルヒエンを語り続け、さらにはこのよなメルヒエンを哲学的研究のテクストにするなどという軽蔑すべき仕事を引き受けるよう私を動かした得たものは、いったい何だったのか。」と。(48)

カントは自分のこの仕事アカデミズムの常識からみれば「軽蔑すべき仕事」であることを十分承知していた。むしろカントはそのような常識からの非難をわざわざひきだし、それに冷水を浴びせるように、つぎのように続ける。

しかし、我々が先に述べた哲学も形而上学というまどろみの国から生まれたメルヒエンなのであるから、わたしがここに両者を結びつけて登場させるにはなんの不都合もない。さらに言えば、偽りの物語への不用心な信仰によって騙されるよりも、理性の見せ掛けの根拠を盲目的に信頼して騙される方が、より立派なことだなどどうして言えようか。(48)

形而上学が視霊現象を「偽りの物語への不用心な信仰によ

って騙される」と規定するというのならば、逆に形而上学も「理性の見せ掛けの根拠を盲目的に信頼して騙されている」だけではないか。カントは彼のこの著作を余りにも俗っぽいものと非難してくるであろうアカデミズムをこのように批判するのである。つまり、カントを「動かし得たもの」とは、視霊現象を素直に信じる、或はそれに迷う大衆を冷やかに軽蔑することによって独断のまどろみをむさぼる自己批判を欠いた形而上学への怒りにも似たいらだちであつたと言えるだろう。

実際、カントは『視霊者の夢』の「第一部独断編」でガイストを形而上学の立場から様々に考察した後につきのようになら述べている。

ガイストの存在に関する哲学的学説は消極的な意味では完成していると言えよう。と言うのも、その学説は我々の洞察力の限界をはっきりと定め、以下の事柄を我々に確信せしめるからである。すなわち我々が認識出来るのは自然における様々の生命現象とその法則のみであり、一方その生命の原理・ガイストの本性は、これに関するいかなるデータもどの感覚にも与えられていないから、知ることはできずただ憶測するだけで、決して積極的には考えることはできないこと。また、

感覺的なもの一切から区別されたものについて考えるには否定に頼らねばならず、さらにはそのような否定を可能にするのは、経験や推論ではなく、一切の補助手段を失った理性が逃げ込んだ虚構なのであること。

このような確信に立てば、人間の霊魂学は憶測された存在に関する人間の必然的な無知の学説と名付けることができるし、こうした学説としてその使命を容易に果たしてゆくであろう。(44)

つまりカントは、ガイストは形而上学においては憶測された存在でしかなく、けっしてこれを確実な根拠をもって考えることは出来ない、と主張するのである。そして、「こうしたものは、将来も、わたしには何の関係もないであろう。」と言いつ切るのである。結局カントにとって形而上学とは根拠のない「夢」であり、メルヒェンでしかないのである。

しかしこのような立場からみれば、視霊現象を全面的に肯定する立場にたつこともできない。何故なら、そこには「一致と一様 (Einstimmung und Gleichförmigkeit)」が欠けており「なんらの経験法則」も基礎付けることができないのである(68)。結局、視霊現象も「夢」であり「メルヒェン」にすぎないのである。

しかし、カントはこの両者の「夢」を否定してしまおう、というのでもない。夢は確かに現実ではない。しかし、意識の事実ではある。ただ現実のいかなる「経験法則」も基礎付けることができないだけである。従って、その存在を「証明」することはできず、それについて確実なことは何も知り得ないのである。

このようにしてカントはガイストに関しては最初の「無知」の状態へと戻る。しかしそれは単なる無知の立場ではない。無知であることを知っている立場なのである。カントは、このような立場に立ちつぎのように言う。

実際には (Gebrauch), このような (遠い彼方にある対象についての騒々しい) 教説など我々にとってほど  
 ちらでもよい (Belohnung) のである。(68)

夢ではない現実においては、カントはガイストの存在に對しては「どちらでもよい」つまり「無関心」という立場に立つというのである。すなわち、ガイストを扱う視靈という現象にもまた形而上学にたいしても無関心という態度を採るといのである。なぜならば、それは普遍的な人間の理性を超えた現象だからである。そのことを明確にカントに意識せしめたのがスエーデンボリの視靈現象であった。形而上学では、理性はガイストについてあたかも自らに限

界がないかのように自由に述べる。ところが視靈現象などという具体的な事案に出会うと、形而上学はなす術を知らないのである。このようにして具体的な経験に基づかない形而上学にカントは決別を宣言するのである。しかし、そこにおいてカントは完全な経験論の立場に立つのでもない。その不確実性も視靈現象の考察によって明らかである。むしろカントはより確実な形而上学、「夢」「メルヒェン」ではない形而上学、つまり「人間理性の限界についての学問(63)」を構想するのである。この「人間理性の限界」を無関心なる立場から見究め、その限界を超えようとする従来形而上学の越権行為を断罪しようというのが『純粹理性批判』という「ひとつの法廷」である。この法廷を開廷するまで、カントは一五年の準備期間を必要としたのであった。

### 三 理性の法廷

しかし、人間理性を超えて神・ガイストについてあれこれと主張する形而上学を断罪するのは決して容易な行為ではない。その主張は、論理的に見る限り、全く正反對の主張さえ、自らを正当化できるからである。このような主張をカントは『純粹理性性批判』の「第二部 超越論的弁証

論」で、「純粹理性のアンチノミー」として取り上げる。アンチノミーとは、元来ひとつの法典において個々の法律が互いに矛盾する事態をいう言葉である。今、カントは理性の法廷において、理性がそれぞれに法律に基づいて主張しているテーゼ間の矛盾を、それぞれの主張に「無関心」な立場において解決しようというのである。その立場とは差し当たっては裁判官の立場となる。

さて、その矛盾する主張とは、カントのまとめ方に従えば次のような対立である。

- 一、世界は永遠の昔から存在しているのか、それとも始まりをもつのか。また、宇宙は存在する物をもって充たされた無限の広がりをもつのか、それともある限界によって囲まれているのか。
- 二、世界にはもはや分割せられ得ぬ何か単純なものが存在するのか、それとも一切のものは無限に分割せられねばならないのか、
- 三、自由によって産出されるものがあるのか、それとも一切のものは自然秩序の連鎖につながれているのか。
- 四、まったく無条件的でそれ自体必然的な存在者が実在するのか、それとも一切のものはその現実的存在に関して条件付きであり、従ってまた外的なものに依存

しそれ自体偶然的であるのか。(509)

カントはこのような矛盾する主張を、ページの見開きの左右に配して印刷させているが、石川文康によれば、この印刷の仕方そのものが当時の裁判の文書の形式を踏襲しているという<sup>③</sup>。あくまでカントは裁判という形式に固執するのである。なぜなら、それが形而上学の「競技場」あるいは「弁証論の競技場(450)」での戦いを終結させる唯一の方法に思えたからである。

カントは、この互いに矛盾する主張を「競技場」から「法廷」に移すに当たって、「不偏不党の試合審判」を媒介とする。いつまでも決着のつかない「弁証論の競技場」にまず審判が登場するのである。

我々は不偏不党の試合審判として、戦っている当事者が問題としている事柄の善悪は度外視して、まず当事者間で戦いを解決させねばならない。(451)

審判は「不偏不党 (unparteiisch)」でなければならぬ。つまり試合の勝敗には「無関心」でなければならぬ。しかし、彼はそこで試合のルールが厳正に守られているか、ということには無関心ではいられない。ところがカントのいう審判は、「まず当事者間で戦いを解決」させようとして審判の仕事を放棄してしまうのである。それは、戦う両者

とも試合のルールを忠実に守って戦っているとしか、審判には見えないからである。故に、問題はルールつまり法律の問題となり、法廷が開廷されなければならないのである。

結局、カントの「無関心」とは、形而上学という「競技場」を支配する法の不整備に対する糾弾の態度の表明ということになる。決して、神やガイストを論ずることへの「無関心」ではなく、各々が整備されていない論理法則に従って自らの正当性を主張するという事態への「無関心」なのである。その事態は、勝手な論理、人間の理性を超えた論理で展開される「夢」でしかないのである。このような「夢」から覚めて「現実において (in der Tat)」有効な法を確定しようというのが『純粹理性批判』という「法廷」なのである。従って、この法廷は「無関心」という契機がなければ開廷できなかった法廷なのである。

このような「無関心」は、ともすれば一切の形而上学的認識・主張への不信・絶望となり、懐疑論となる。実際、カントは自らの態度を「懐疑的方法」と規定する。しかし、そのような一切に絶望した無関心はいまさら法廷を開廷しようとは思わない。それは、「懐疑論 (Skeptizismus)」と呼ばれる態度を採るのが普通である。カントも「懐疑的方法」を採るが、それはいわゆる「懐疑論」とは異なる態度

である。その差異についてカントは次のように述べる。

その懐疑的方法は、いわゆる懐疑論 (Skeptizismus) とは全く異なるものである。いわゆる懐疑論とは、人為的・学問的な不知という原則であり、それは、あらゆる認識の根本を破壊し、できることなら認識に対する信頼と確信をあらゆる場所から消し去ってしまおうというものである。それに対し、私の採る懐疑的方法は、確実性へとむかう。この方法は、相対する両者が自分なりに忠実にそして悟性的に自説を主張し合う論争において、誤解点を発見しようと努め、そして、あたかも賢明な立法者がするように、訴訟の際に裁判官が陥る困惑から、その裁判官が手にしている法律の欠陥と不正確な規定に関する教示を、自分自信の為に引き出すというのである。(451 f.)

ここに「懐疑論」とか「懐疑的」とか訳されるスケプシスというギリシャ語を起源とする言葉は、カントの言葉を借りていえば「双方の主張の争いを傍観する、あるいはむしろその争いを引き起こす」という意味合いを持つ言葉である。つまり、積極的な解決を放棄して、眼前の事態に「無関心」を決め込み、自分だけの心の平安の中に閉じこもろうという態度をいうのである。従って、「懐疑論」とは「傍



「観主義」とでも訳した方が良い言葉である。その意味では、カントの言う「いわゆる「懐疑論」の方が、この言葉の本来的意味に近いであろう。だからこそ、カントは自分の「懐疑的方法」について注釈をつけるのである。

その「懐疑的方法」とは、次のような方法である。まず、双方の争いを傍観する。それは、双方の正否に「無関心」な裁判官の立場である。この裁判官が、現在の法律で判決が下せるのならば問題はない。しかし、その法律では両者とも正しいのである。そこで、このような法律の支配する世界に絶望し、自分だけの世界に閉じこもるのが「いわゆる「懐疑論」」である。しかし、カントはここで争っている双方の主張よりも、その主張がよりどころとしている法律そのものの正否を問おうとするのである。それは、裁判官としてこの事態に対処し、困惑しきった末にたどり着いた地点である。この「困惑」を、カントは『視靈者の夢』以来一五年の間、自ら引き受けていたのである。それが「無関心」を強調せねばならない所以である。しかし、カントは単なる裁判官にとどまるのではない。法律を十分吟味して、そしてその法律の欠陥を暴き、今度はあたかも「賢明な立法者」のごとくに振る舞おうというのである。つまり、カントの言う「懐疑(傍観)」とは、この立法へいたる

ための「方法」なのである。したがって、カントの形而上学という「競技場」での戦いの勝敗への「無関心」は、形而上学そのものへの「無関心」、ましてや絶望・否定では決してない。

では、そのような「懐疑的方法」をどのように進めるのかを、第一のアンチノミーの解決を見ることによって、簡単に見てゆこう。

いま「理性の法廷(529)」では一方が「世界は始まりを持つ」と主張し他方が「世界は始まりをもたず、永遠の昔から存在している」と主張する。両者の主張は、それぞれ正しく、裁判官はどちらにも「有罪判決を下し得ない(530)」とする。この争いを根本的に従って双方が満足するように決着させるには、次のような方法しかない。つまり、双方は確かに相手を見事に論駁できているのだが、最終的には、彼らが争っている当のものはある超越論的仮象が何も存在しないところに存在するように見せ掛けた現実にはすぎないと、双方を説得するしかないのである。(529 f)

双方を説得するというのであるから、当然カントは「不偏不党」の「裁判官」として、双方の利益・勝敗に「無関心」な立場にたたなければならぬ。従って、カントはここで

慎重に双方の主張を整理し、その中間に立つとうとする。

しかし、いったいそのような第三の立場はいかにして可能なのだろうか。そのとき、もし、双方の主張が、「世界は空間的に無限である」、「世界は空間的に無限でない」ということになれば、前者が偽であれば後者は真である。なぜなら、「世界は空間的に無限でない」という命題は、有限な世界を肯定している訳ではないからである。ところが、「世界は空間的に無限である」、「世界は空間的に有限(非無限)である」という主張においては、「世界は有限でも無限でもない」という第三の立場が有り得る、とカントは言う。この第三の立場からは、双方の主張は両方とも偽となる。何故なら、双方の主張は「世界が物自体として量的に規定されて与えられている」という前提に従っているからである。その前提こそが、彼らがよりどころとする法律である。しかし、第三の立場に立つカントは、その法律そのものが間違っていると主張するのである。つまり、「世界は物自体として与えられているように見えるが、それは人間の理性が避けることのできない超越論的仮象でしかなく、実はそうではない。世界は我々が構成する現象にすぎないのであって、それ自体存在するものではないから、無限でも有限でもない」と両者を説得するのである。

このような第三の立場、「無関心」の立場を形成するとき、大きな役割を果たすのが、いわゆる「コペルニクス的転回」である。つまり「我々の認識はすべて対象に従って規定される」という認識論から「対象が我々の認識に従って規定される」という認識論への転回である。この転回は、一見きわめて人間中心的な転回に見える。しかし、この認識の転回は「物自体」という人間理性には手の届き得ぬ新たな領域を形成した。つまり、この転回によってカントは『視靈者の夢』においてみずからの課題とした「人間理性の限界」を画定したのである。

つまり、カントはここにおいて「人間理性は物自体の領域を侵してはならない」という立法の原則を確立したことになる。この原則に従って争う両者を説得する裁判官の「無関心」なる立場は、最初のこの事態に困惑していた裁判官の「無関心」とは既に異なるものである。この「無関心」は新しい法律の遵守に積極的に関心をもち「無関心」なのである。

#### 四 制限された信仰

このように見えて来ると、カントの「無関心」という立場は、決して中立的立場ではなく、むしろ「人間理性の限界」

を画定するという戦略目標から導き出された一種の戦術的立場ということができよう。『視霊者の夢』から『純粹理性批判』に至るまでのカントの差し当たつての目標は「人間理性の限界」を画定することであつた。そのためには、理性の限界を超えて神について語る従来<sup>の</sup>形而上学には無関心を決め込むという戦術を採用したのである。それは具体的に戦いの場を「競技場」から「法廷」に移行することである。決着のつかない形而上学間の争いは、法廷で最終的な審判を受けるのである。それは、いわば「喧嘩両成敗」という判決であつた。この「喧嘩両成敗」という両者の利害には全く「無関心」にみえる判決の裏には、人間に解決不能な係争は「天」に委ねるといふ思想がある。カントも「物自体」という「人間理性の限界」を超えた領域を持ち出すことによって、この解決不能の争いを解決したのである。

確かに争う両者の利害に無関心なる裁判官の支配する法廷での判決は絶対的なものである。しかし、その絶対性を支えるのは「物自体の領域を侵してはならない」という原則なのである。この原則を確立し、かつその有効性を実証するための戦術が「無関心」といふ立場なのである。

しかし、カントの目指す究極の目標は、「人間理性の限

界」を画定することに尽きるのではない。それは、「信仰に場所を空ける」ということを究極の目的としているのである。それは『実践理性批判』で道徳的宗教として実現されることになる。しかし、この道徳的宗教という立場は、『純粹理性批判』の必然的帰結として導き出された立場ではない。カントは『視霊者の夢』において既に道徳的宗教の可能性を示唆している。そこでは、カントは道徳的行為と幸福の不一致についてつぎのように述べている。

ひとはこの世における道徳性とその結果の調和が不完全であるとき生じる困難を打開するため特別な神の意志に保護を求めなければならない。しかし、理性の単なる根拠に基づく憶測に従う場合、それは難しい。というのは、このような神の意志に関する判断でさえも神の叡知に関する我々の概念に従つて下されることからも明らかのように、常に次のような強い疑念が残るからである。つまり、我々の悟性の不確かな概念はひよつとしたら最高存在にぎわめて歪んだ形で適用されているのではないか、という疑念が残るからである。

このような疑念が残るのは、人間の義務とは、神の意志を判断する際にも、ただ人間がこの世で知覚でき、類比の法則すなわち自然秩序の従つて推測可能な整然

とした事物の有様から判断することのみであって、決して人間の知恵の勝手な見取り図に基づいて判断しないことである。しかし、人間はそのような勝手な見取り図を神の意志に指示し、同時に現世と来世の勝手な新しい秩序をでっちあげることになってしまっているのである。(26)

ここにおいてカントは神の意志を人間の側から勝手に憶測することを慎重に禁止しつつも「この世における道徳性とその結果の調和が不完全であるとき生じる困難を打開するため特別な神の意志に保護を求めなければならない」と述べる。しかし、その「神の意志」は憶測されてならない。従って、『視霊者の夢』では、道徳的宗教は実現するにはいたらない。しかし、カントはその『視霊者の夢』を終えるに当たっても一度道徳的宗教についてのべている。

正しい魂の持主は死んでしまえば全ては終わりなどとは決して考えず、その気高い心情を来世への希望へと高めていた。従って、良い行為はあの世への期待に基づくとするよりも、来世への期待は優れた魂の感覚に基づくとしたほうが、人間の本性と道徳の純粹性にふさわしい。道徳的信仰もこれとおなじである。道徳的信仰の単純さはこうるさい屁理屈をこえて、人間を単

刀直入に真の目的へ導くから、この単純さのみが全ての人間に適応するのである。だから、遠い彼方の対象についてのこざかしい数説など暇な人々の思弁へ心配に委ねよう。こうした教説など我々には実際どうでもよいのである。(69)

カントはここではつきりと「道徳的信仰」から見ればガイストに関する様ざまの教説など「どうでもよい」と言い切る。すなわち、われわれがこれまで見て来た「無関心」という立場は、最初から（少なくとも『視霊者の夢』刊行時点から）「道徳的信仰（宗教）」を最終目標とするカントの戦術的立場であったのである。

しかし、「無関心」という立場は任意に選ばれた立場ではない。確かに、道徳が問題となる現実的行為においてガイストに関するこざかしい教説など「どうでもよい」ということになる。ところが、その道徳的行為そのものも自分の利害に関して「無関心」というところで始めて成立する。つまり、道徳的行為は現実の幸福や「あの世への期待」に対しては常に「無関心」であらねばならないのである。「君の意志の格律が、常に同時に普遍的立法の原理として妥当するように行為せよ」という純粹実践理性の根本法則は、なによりも自分の利害にかんする「無関心」を前提とする。

従って、「無関心」という立場は「道徳的信仰」という究極目標から必然的に要請された立場でもあるのである。

しかし、何故カントは宗教を道徳的なそれに限定せねばならなかったのであろうか。このような文脈においては、反対に、カントの数学・自然学を模範とする中立性・普遍性を重んじる思惟形式（「無関心」の立場）が、信仰を道徳に限定してしまったとも言い得るのではないか。このように考えるとき、スエーデンボリの視霊現象という特異な事実がカントの思惟形式を形成するうえできわめて大きな役割を演じていることは明らかであろう。この現象に つとめて冷静に対応した結果、従来 の形而上学に対しても今一度冷静に対応することになり、そこに「無関心」という立場が成立したのである。そのような「無関心」なる知において可能な信仰は、道徳的信仰に限定されねばならない。カントは「信仰に場所を空けるために、知識を制限 (aufheben) せねばならなかった」とは言うが、そのことは同時に「知に場所を空けるために、信仰を制限せねばならなかった」ということを含むのではなからうか。

いずれにせよ、「無関心」という立場、そしてそれから導き出される「法廷」というイメージは、カントにおける知の在り方・信仰の形態を規定する大きな要因であることは

明らかであろう。つまり、「無関心」——gleichgültig どちらも妥当せしめる——という立場が、叡知界と現象界の間地点に立つという超越論的立場を可能にしているのである。それはきわめて微妙なバランスを人間に強いる立場である。しかし、それはカントにとって、理性と信仰を両立せしめるぎりぎりの選択であったのである。

#### 註

カントの『視霊者の夢』はPHB版を使用。( )内にページを示す。『純粹理性批判』については慣例通り序文については( )内にA版・B版の別、ページを示し、本文についてはB版のページを示す。

① 翻訳に際しては金森誠也氏のもの（『霊界と哲学の対話』、論創社、一九九一年）を参照した。また、坂部恵『理性の不安』（勁草書房、一九七六年）の『視霊者の夢』の周辺という論文には『視霊者の夢』の読みに関して教えられることが多かった。

② これは「シャルロツテ・フォン・クノープロッホ嬢への手紙」と『視霊者の夢』(筒からの大意)。

③ 石川文康『法廷モデルと無限判断』（講座 ドイツ観念論 第二巻）一九九〇年、弘文堂、所収）参照。

（本学専任講師 宗教学）

（平成四年十一月十一日受付）